

曜変天目の永久的な光彩

曜変天目新発見への疑問

日本のあるテレビ局の「何でも鑑定団」2016年最後の番組で同番組史上最高の発見が発表された——世界で4点目となる曜変天目茶碗の発見と本物との鑑定。満場の高揚と騒然の翌日、日本国内の有名な新聞3紙や海外向け新聞がこの「国宝級の重大発見」ニュースを報じた。私は偶然に、親子二代に亘り、70年あまり曜変天目の研究を続けてきた長江惣吉さんを取材し、「曜変天目を追いつける陶芸家」の記事を完成したばかりである。

番組の後、長江惣吉さんからメールが届いた。宋代陶芸の最高傑作の曜変天目の定義は、茶碗内面の黒釉の上に大小の星紋が群れ、その周囲光彩が輝く。一般の人でも、このような特徴を知れば、鑑定された茶碗の輝きのない釉調を見破ることができる。長年の曜変研究の経験から、これは近年中国で作られたレベルの低い偽物と推定し、鑑定結果に強烈的な疑問を持っているとの内容だった。

長江惣吉さんは長年交流のある中国福建省の曜変研究の専門家と連絡を取りあった。建盞焼成技術で中国から人間国宝に認定された孫建興さんから「偽曜変だ。現代に焼成されたもの」と返信され、建盞研究と鑑定の権威者の謝道華さんからも「テレビの鑑定品は建陽市の工房窯で作られたもの、古陶磁商店街では数百円で売られている」と見解を受け取った。

このような茶碗は日本のネットオークションでも売られており、ありふれた偽物と長江さんは言う。この「何でも鑑定団」は娯楽番組に過ぎず、その評価価格は概して不正確で骨董市場で通用するわけでもない。ただ、今回のテレビ番組の事前宣伝と多媒体の「国宝発見」の報道は公式なもので学術文化に与える影響も大きい。この件についてはいずれ世間から非難が出ると予想されるようだ。

曜変天目茶碗に対する研究や科学的な鑑定手段がかなり進歩してきたので、巧妙な曜変贋作でも識別可能と長江惣吉さんは言う。そこで、曜変についての長年の研究成果を教えてくれた。

天目茶碗と建窯

曜変といえば、天目茶碗と曜変を焼成した中国福建省の建窯を知る必要がある。天目茶碗は茶道の茶碗の種類である。鎌倉時代に中国浙江天目山で留学した日本の禅僧たちが中国の喫茶文化と茶碗を日本に持ち帰ったとき、その形の茶碗を天目と名付けた。南宋時代の建窯の黒釉天目は上等とされ、建窯の高度な焼成技術を駆使して作られた曜変は天目の最高峰であり宋代の喫茶文化、陶磁芸術の結晶とされる。「天目」と「曜変」は日本で生まれた名称だが、今は国際的な学術専門用語として使われている。

曜変天目が世界の陶磁史上で注目されるのは、その美しさとわずかな個数だけではなく、焼成技術が残っていないからだ。長江惣吉さんは22年にわたって曜変への粘り強い研究のなか、建窯の度重なる現地調査と様々な技法推論への検証から、曜変に対する見識とその再現焼成メカニズムと技法を確立した。

宋代建窯の黒釉茶碗が上質として有名で、生じた鮮やかな光彩が魅力的である。これは建窯の独自の光彩技法（酸性ガス法）の焼成結果である。窯の中の温度が下がる途中の900-700℃で酸性鉱物を投入することによって発生した酸性ガスが釉に化学反応を起こし、光学でいう構造色の微細構造

を形成する。この微細構造が光線を反射するので鮮やかな輝きの光彩が見られる。茶碗内側の星紋と光彩が同時にある曜変はこの焼成技法の絶妙の運用から生まれた極意の効果である。

曜変焼成技法

建盞の釉調は兔毫、銀兔毫、油滴、烏盞、褐釉、蓼冷汁、曜変等の種類がある。これらはすべて同じ胎土と同じ釉薬が使用され、焼成温度も同じ（1300℃±50℃）である。釉調の違いは焼成時の窯内の酸化・還元雰囲気の様々な組み合わせによる。

曜変の星紋は釉が破裂した個所が平滑に戻った破裂痕である。酸性ガス法を行うと破裂痕の周囲に析出した磁鉄鉱質結晶の排列で凸凹のしわが構造色の微細構造となる。このごく微小なしわは走査電子顕微鏡で確認することができる。光彩はそのしわの凸凹によって光線が散乱や回折を起こした結果（構造色）である。光線にあたる角度が異なると、違う波長の光が反射され色も違ってくる。これは生活の中のCDやシャボン玉、きれいな蝶々の翅の虹色と同じ原理である。

曜変天目の光彩は永久的

重金属類による光彩技術で曜変を再現する人が少なくない。重金属は空気のなかで酸化が進むため、その光彩は時間によって試される。重金属で作られた「曜変茶碗」に酸性液体を入れると、その光彩の劣化を観察するに長時間はいらない。2009年中国杭州で地下に700年あまり眠っていた曜変の破片が発見された。その星紋と光彩は日本に保存されている国宝曜変とほとんど変わらない。長江惣吉さんは科学的手法と考古学の多面による分析と解析から建窯の曜変は重金属技術ではないという結論を導き、中国の国際古陶磁科学技術討論会で発表を行い大きな反響を得た。

宋代建窯の光彩の破片の光学測定や化学解析から曜変の形成メカニズムが推論できたが、実際焼成作業では、酸性ガスへのコントロールは模索状態にとどまっている。長江惣吉さんは、極力、宋代と同じ状態での焼成を行うため、使用する原材料は建窯で採取したものであるが、同じ分量の酸性物質と同じ方法で温度と時間を調整しても天候温度と湿度の微妙な差で焼成結果が大きく変わる。

2006年長江惣吉さんははじめて曜変天目の再現を成功し、5年前中国の学術専門誌でその研究成果を公開した。論文通りに検証し成功する者がまだいないようだ。長江惣吉さん自身でさえ数千個以上焼成し、理想な作品は2つしかないそうだ。

古代も今も、曜変天目茶碗は数千や数万個の茶碗から偶然できたものと思われてきた。しかし、偶然は長期的な努力と積み重ねた経験の必然である。数十年間曜変の魔性の光彩へのたゆまず研究と実践から、長江惣吉さんは、曜変天目が現れる偶然性を減少させた初めての成功者と言えるだろう。